

雅歌の解釈に直に着手する以前に何よりも『箴言』と『伝道の書』の解釈が要請されている点に注意する必要がある。なぜなら、徳殊にアパテイアや自然の観照 (Theōria) の基礎付けなくして雅歌の神秘の闇やエクスタシスに直参すると『出エジプト記』の金の小牛事件に象徴されるように、人は幻想や情欲の虚無に陥るからだという。こうしてみると例えば旧約に限ってみても教父の聖書解釈は諸書を一連のつながりにおいて読む連続的統一的道行き (アコルーティア) を辿っていることが分かる。すなわち、『創世記』『出エジプト記』『箴言』『伝道の書』『雅歌』などをアダムの墮落や自己分裂から自己の新生、他者との交流、共同体の成立へとという風に連続的統一的 (アポケバライオーシス) な仕方でも読み破り読み直し進むのである。このアコルーティアは例えば『創世記』一書にも適用される。つまり『創世記』を個別的アトム的にエピソード毎に象徴的に解釈するのではなく、一つの筋や目的連関内に統一的に読むのである。恐らくこの統一的読解の視点こそ、教父の聖書解釈の根底的方法として理解されよう。しかもこの視点は、アコルーティアがオイコノミアの意味をも具備することが示すように不断の回心とは自・他の連続的創造的交流の歩みそのものでもある。論者はこのメタノイアの修徳的行為論的なアコルーティア解釈に着目したい。最後に現代の言語哲学や聖書釈義学で定義されたアレゴリーやメタファーなどの意味が教父における根拠現成のアレゴリアやメタフォラなどの意味と重ならないばかりか、解釈学上修徳上また意味論上むしろ放棄になっているのではないかと思われるので、教父の聖書解釈の研究を通じて逆に現代の解釈学の視点や方法などを豊かに再考察し、脱構築できるのではないかと考える (森泰男氏との関連で)。

意見

創造と受肉をめぐる

谷 隆 一 郎

提題者お二人の言葉を借りれば、「創造は過去の一時的な出来事にとどまらず、聖句の現存を通して今や読者自身が造り変えられるよう招かれている」のだが、そのことはまた、「テキストの読解が愛智として展開されねばならぬ」ゆえんの根源的事態であろう。だがそれにしても、神を主語とした「世界の、そしてつまりは人間の創

造」と、「われわれ自身の変容ないし再創造」とは、内的にいかなる仕方で結びついているのか。

よくもあしくも学的に対象化された問題の根元に立ち帰ろうとする際、くだんの聖句の現存ということについて改めて反省しておくべきは、それは、その言葉をはじめて発語した人々の、超越の働きを何らか宿した経験ないし知そのものであったらうということである。そしてそうした経験とは、ほかならぬ自己が（集合人格としてであれ）はじめて「わたしは在る、在らんとする」たる神の現存に触れたかのごとく、何らか非存在へと傾いていた罪の状態から、存在への与りへと新たに呼び出されること、造り直されることであったと考えられるのだ。というのも、『創世記』が実はイスラエル民族のバビロン捕囚後に記されたことから多少は察せられるように、そこでの世界創造の記述は、自他の存在することの通俗的な了解とともに平板に対象化されて語られたのではなく、民族の存亡、その同一性の危機の中、しかもそうした事態が単に政治的外的な力関係のゆえに生じたかに見えて、その実それは民族の罪の帰結であったと知らしめられた経験の中から、はじめて語られ得たのであろう。つまり「神からの背反」＝「非存在への落下」としての罪という言葉・知の成立は、神（＝存在）の厳しくも慈しみ深い現存に何らか逆説的に関与せしめられる経験でもあったのである。

ところで、使徒や教父たちは旧約の言葉をいわば新約の光、受肉したロゴス・キリストの現存の中で受けとめていったとされようが、そのことは上のような創造と再創造の経験の何らか同心円的な深化としてあったと考えられる。その際、言うまでもなくキリストの受肉なり神人性なりの教理が彼らの経験に先行していたのではなく、また人間・自己や人格（ペルソナ）などの同一性がいわば局外に確保されていたわけでもない。受肉についての信というかたちの成立と、人間・自己の成立とは恐らく同根源的な事態なのだ。キリストの受肉とは何らか客観的な知の領域においてあるものではなく、また客観的事実であるかのようにまず措定された受肉なるものが、次に何らか主観的決断に委ねられるというのでも必ずしもない。受肉とははじめから、すぐれて「信ずる」という志向的働きの負荷がかかった事柄なのである。すなわち、神的ロゴスの受肉への信という、「魂の自己超出的な愛のかたち」それ自身が、恐らくは神性の働きの何らか現成し受肉してきたかたちだと言うべきであらう。というのも、使徒なら使徒がどこまでも己れを無にしつつ己れを捧げゆくような愛に促されたとき、

その脱自的愛の、「成立の根拠」＝「志向する究極目的」として、神的ロゴスの受肉、神人的ヒュポスタシス・ペルソナの現存が、ほかならぬ脱自的愛それ自身の根底に観想されていったと考えられるからである。とすれば、キリストの名、その現存とは、単に対象的な知としてではなく、人が何らか己れに死しつつ神・存在に関与してゆくことの根拠として、そして同時に、神的ロゴスの現成へと共に与りゆくべき存在として他者を見出してゆくことの根拠としてあるのだ。この意味では「聖句の現存」とは根本においては、使徒的経験における「キリストの神人性への信」を表わしているが、それはまた、ほかならぬ我々自身の存立そのものでもあるような、脱自的の愛の現存の典型的な姿を指し示しているのではなかろうか。